

月に向かって手を伸ばせ

吉川結衣

やっ、と手を伸ばして、届くかと思ったら届かなかった。自分の身長を恨む。すぐ目の前に見えているのに。今にも中指が触れそうなのに。

この感覚は、約十年前、月に向かって精いっぱい手を伸ばしたときのものに似ている。当時幼かった私にとって、世界で一番高い場所は、ジャングルジムの頂上だった。満月の夜にこっそり家を抜け出して、近所の公園にあるジャングルジムの頂上から、月に向かって思い切り腕を伸ばしてみたことがある。だけど当然ながら、私の小さな右手は空を切るだけだった。その後泣きながら家に帰ったら、両親に無断で家を出たことを叱られたのをよく覚えている。

月は私の憧れだった。叱られてでも手に入れたい、と思うくらいに。

そのときのもどかしさや、自分の無力さへの失望が、今この瞬間の感覚と限りなく似ている。

——今、市立図書館の本棚の前で、ぎりぎり届かない本に向かって手を伸ばしている感覚と。
中指に差し迫る、夏目漱石。

と、自分では思っていない、実際はもう少し距離があるのかもしれない。月に向かって手を伸ばしたときもそうだった。もう少しなのに、と悔しがっていたら実はとんでもなく遠いところにあるのだと知ったのは、それからずいぶん後だ。

自分の身長に可能性の限界を感じて、脚立を使わせてもらうことにする。ジャングルジムよりずっと低い脚立だけど、本を取るには充分の高さだった。

いくら必死で手を伸ばしても届かないとき、私たちは土台となるものを使うか、目標の位置を低くする。あるいは両方。

人はそれを、妥協と呼ぶかもしれない。

「月が綺麗ですね」

カウンターで貸出手続きをしてもらう際、ベテラン図書館司書の成瀬さんがバーコードリーダーを操りながらそう口にした。来年でついに半世紀生きたことになるという、珍しい男性の司書さん。

不思議に思っで見返したけれど、彼は何事もなかったかのように、背表紙の裏に貼られた紙に返却期限の判子を押している。

「……今、夕方ですよ」

「知ってるよ」

あっさりと返され、ますます意味がわからない。私は曖昧に首をかしげる。

判子を押された夏目漱石が渡されると共に、告げられるネタばらし。

「夏目漱石が、そうやって訳したんだって」

「何をですか」

『「Love you.」』日本人にとつての愛の言葉は、月の美しさを共有する言葉だって意味」

へえ、と感嘆の声を漏らした私に、成瀬さんはちょっと得意げに笑ってみせる。

「よく近代文学読んでるから、知ってるかと思ったのに」

「いや、成瀬さんの知識量には到底敵わないです」

なんて素敵な訳し方なのだろう、と思った。確かに、日本人で愛の言葉を簡単に口に出せる人は少ない。月の美しさを湛える人も、現代では少なくなってしまったかもしれないけど。

「それじゃ、十月四日に返却お願いします」

十月四日。今日から二週間後。自転車での帰り道に心の中で返却日を反芻して、そういえば、と思い当たる。十月四日って、今年の中秋の名月の日だ。ちゃんと晴れるだろうか。

この時期は、台風が来たり秋の長雨があったりして、せつかくの重要な日なのに晴れてくれないことのほうが多い気がする。

「月が綺麗ですね」。夏目漱石にとつての「Love you.」。あつころ、ジャングルジムの頂上から目指した満月は、夕空の中には見えなかった。

「進路希望調査」と印刷された紙に、私はため息を吹きかける。まだクラスと名前しか書いていないその紙は、どこかへ飛んで行ってくれることもなくて、一瞬ふわりと浮き上がっただけですぐに机の上に着地した。

何も書ける気はしないのに、無駄にシャーペンの頭をカチカチと押ししてしまう。今日借りたばかりの夏目漱石に救いを求めたくなるけれど、もう少しだけこの白い紙と向き合っていないければいけないように思えて、またカチカチ芯を出す。

「志望大学」。「希望する職業」。望みどおりに人生が進んでくれるわけではないのに、そんなことを自ら文字にしなければならぬ。こういう紙を前にするたび、私は未来の自分が上手く想像できなくて不安になる。

提出の最終締め切りは、二週間後だ。今日借りた夏目漱石の返却期限と、中秋の名月の日と同じ。この本を返す前に、月が満ちる前に、私はひとまず担任の先生に見せられるくらいの希望を書き表さなければ。

こんな私でも、これまで一度も将来を夢見たことがないわけではなかった。

いつだったか、「あなたの将来の夢は？」という校内アンケートに、「宇宙飛行士」と書いてしまおうかどうか迷った挙句「まだ決めてません」と書いた覚えがある。ジャングルジムの頂上からでも、エベレストの山頂からでも届かないあの月に、一度でいいから行ってみたい、とひそかに願っていた。

そんなささやかな夢は、誰にも語ることなく断念した。倍率百倍以上は当たり前らしく、

現実的に無理だと悟ったのだ。真剣に目指し始めてから諦めざるを得なくなるよりは、よっぽどまし。それに、私が行きたいのは「宇宙」ではなく「月」に限定していた。宇宙飛行士にはきつと向いていない。

そう考えたから、もう月に行くことなんて諦めた。……つもりだったのに。すぐそばの、夏目漱石に視線が引き寄せられる。

ああ、彼も月の美しさに魅せられていたなんて。そしてその美しさを、愛の言葉に置き換えたなんて。

月が綺麗ですね——その言葉と、私の月への恋心が、共鳴してしまった。

その日の夜に家を抜け出し、昔よく遊んだ公園へ久しぶりに行ってみた。あまり広くなく、人気のある公園というわけでもないで、夜になればもう誰もいない。

数少ない遊具のうちの一つ、複雑に交差する鉄の棒に、私は手をかけ足をかける。頂上にとどり着くまでに、どこからか流れてくる虫の声や、頬を掠める風の匂いが、もう秋だ、と思わせた。

昔より小さくなったように思えるジャングルジムの頂上に腰を下ろし、両手でしっかりと身体を支えて夜空を見上げる。けどすぐに、あれ、と思う。

月がない。

この世界の全てを覆っている空を、隅から隅まで見渡してみる。でも見当たらない。雲の裏に隠されてしまっているのかもしれない、とも考えたが、ようやく気づいた。どうして今まで気づけなかったのだろう。

今日は新月だ。二週間後に中秋の名月を控えた今日は、新月だ……。

このあまりに広い空の中に、月がない。その現象は、これまでも毎月一度必ず訪れていたはずなのに、今の私はそんな事実を受け入れられないでいた。月がない空。そんなの、寂しすぎる。

無邪気に手を伸ばしていた十年前なら、月だけでなく星の光も私たちを見守ってくれていたのに、今は地上が無駄に明るすぎて、星たちも顔を見せなくなった。

今でも時々、恋い焦がれるように思い出すことがある。幼いころに住んでいた町の空。私は幼稚園の最初の一年間をその町で過ごしたが、父の仕事の都合で今住んでいるところへ引っ越してきた。

その町は空気が澄んでいて、夜空が綺麗だった。星がよく見えたけれど、私は無数に散らばる星よりも、星空の真ん中でただ一人佇む月に見とれた。

月が明るすぎる夜は、星が見えにくくなる。月の及ぼす影響の大きさに圧倒された。満月が輝けばその周りの星の海さえかすんでしまう。充分綺麗なはずの星が、月を前にすると途端に敵わなくなる。

こちらに引越すことになって、幼心に不安は感じていたものの、ここにも月の光が届いてくることを知って無性に安心した。

どこで見ても、月は月だった。見える星の数は一気に減ってしまったけれど、月だけは同じ明るさで煌々と輝いていた。

そんな月に、私はずっと、憧れている。

「小説の中だったら、どこへでも行けるよ」

成瀬さんの穏やかで静かな声。館内には他にも何人かいる中で、それは私の耳元にだけ届いた。

新月の日に借りた夏目漱石はまだ読み終わっていない。そして、返却日までも日にちがある。

それなのに、私は今日も図書館を訪れた。ここに来れば、悩みごとなんて全部本が吸い取ってくれるような気がしていた。

「どこへでも行ける、って、どういう意味ですか」

いつもとは違う位置から、カウンターにいる成瀬さんを見返す。小説のコーナーは一番奥にあるので、普段小説しか借りない私は、本を選びながら成瀬さんと会話をすることなんてできないはずだった。

「実際には行けなくても、小説の世界は僕らをどこへでも連れて行ってくれる。それだけの意味」

あまり明確なことは言わず、成瀬さんは穏やかに微笑んでいる。

「……え」

月に行きたい、なんて実現不可能な夢を、もちろん成瀬さんに言った覚えはなかった。

そもそも、誰にも言ったことはない。なのに、私がまたひそかに抱き始めようとしていたそれを、成瀬さんにはいとも簡単に見破られてしまった。

私が戸惑いながらその場で固まっていたからか、成瀬さんは椅子に深く座り直し、指を組んだ両手を机に置いて続ける。

「いつもは小説のコーナーしか見ないのに、そんなところにいるから。もしかしたらと思っ
って」

その通りだった。カウンターのすぐそば、普段は素通りしていた宇宙コーナーの前、特に、月に関する本が並ぶところ。夏目漱石の言葉のままにこのコーナーに来てしまったようなものだが、私はどの本にも手を伸ばすことができずにいた。どれか一冊でも手に取ってしまえば、一瞬で完全にその世界にいざなわれてしまいそうで。

きっと本当は、ずっと見て見ぬふりをしてきただけだった。再び月への興味が湧いてしまわないように、再び叶わない夢を追いかけてしまわないように。結局、その興味と叶わ

ない夢はこうして湧き上がってきてしまったのだけど。

何も言えずにいる私に、成瀬さんは試すような視線を向けてくる。

「ところで、小説は、フィクションでありながらノンフィクションでもあるって知ってる？」

「えっと……フィクションじゃないんですか」

突然の問いに困惑しながら答える。そんなことは当然初耳だった。

フィクションでありながらノンフィクション。明らかに矛盾している。確かにこの世にはノンフィクション小説たるものが存在しているけれど、成瀬さんが言っているのはおそらくそういうことではないだろう。

私の反応が予想通りだったのか、成瀬さんは満足そうな笑顔を見せてから話し始めた。

「小説は、読者や作者にとってはもちろんフィクションだよ。でも、作り物の登場人物や世界や出来事だって、真実になりうるんだよ」

成瀬さんの言っていることが理解できない。作り物なのに真実。やはり矛盾している。

そう思うのに、一方で私は確信していた。成瀬さんの言葉の中に矛盾なんて存在しないだろうと。

「読者にとっても作り物。作者にとっても作り物。だけど、読者でも作者でもない人物、すなわちその小説の登場人物たちにとってその作り物は、紛れもない真実だと思わない？」

成瀬さんは私の興味がそこに向いていることをしっかりと確認するように、一文字一文字丁寧に発音した。

「登場人物たちは、確かに小説の中に存在していて、呼吸をしていて、生きている。小説内のその世界も、その出来事も、登場人物にとっては全てが真実。だから小説は、フィクションでありながらノンフィクションでもある。そう言えると思うんだよ」

なるほど、と思わずにいられなかった。フィクションでありながらノンフィクション。作り物なのに真実。矛盾しているはずの言葉は、実は全く矛盾なんてしていなくて、むしろこれこそが正しい解釈だと言えるかもしれない。

小説の中なら本当にどこへでも行ける。フィクションとしてだけじゃなく、ノンフィクションでも。虚構で作り物のその場所に行くだけじゃなく、登場人物たちが、実在するそこに行ってくれる。

「それも、夏目漱石の言葉ですか」

私の心をこんなに動かすのだから、もしかしたら、と思った。だけど、

「まさか。違う違う。僕の持論だよ。偉大な文豪と並べないだよ」

言葉通り、まさか、という顔をして成瀬さんは言う。

私の心を動かすのはもちろん、夏目漱石だけではなかった。心を動かす言葉をたくさん教えてくれる、成瀬さん自身もその一人だった。

私の周りは、私の心を動かす言葉で溢れている。

「一介の図書館司書が、本に囲まれながら常日頃考えてる、ただの屁理屈だよ」

成瀬さんは自嘲気味に言う。もしそうだとしても、私には大きな意味のある屁理屈だ。誰かの心に希望をもたらすのなら、理路整然としても誰の目にも留まらない理屈よりも、ずっと素敵なものだろう。

家路に着くころには、辺りはほとんど暗くなっていた。うつすらと雲のかかる夜空に、ぼつんと浮かんでいる細い三日月。それが笑っているようにも見えた。

学校の図書室だけでは満足できずに市立図書館に通い始めたのは、中学生のときだった。そのときから、成瀬さんは今と変わらずカウンターにいて、膨大な知識の一部を私に分け与えてくれる。

成瀬さんは、私の憧れだ。

返却期限ぎりぎりまでかけて読み終えた夏目漱石を返却しながら、成瀬さんと感想を交わした後、思い切って「あの」と切り出した。

「月に行ける小説、教えてください」

小説の中なら、どこへでも行ける。自分自身は行けなくても、その登場人物が代わりに行ってくれる。

私はもちろん、どう足掻いてもおそらく月には行けない。それなら、遠慮なく、存分に、小説の持つ力に頼るしかない。

成瀬さんは、記憶を手繰り寄せるように少し視線を上げる。

「そうだな……ジュールヴェルヌの『月世界旅行』なんてどうかな」

成瀬さんは蔵書を検索できるパソコンを使わず、記憶の中からびったりな本を選び出した。この図書館の本を、全て読み尽したのではないかと思ってしまう。

「一八六八年、南北戦争直後のアメリカ、蒸気機関車が実用化されてわずか二十年。そんな時代に、月へ行こうとするんだ。大砲を使って」

「人間が大砲に入って、ってことですか」

思わず聞き返した。成瀬さんは少し笑って「そう、大胆だよね」とうなづく。

成瀬さんの紹介する本は、短い言葉でも、その面白さがひしひしと伝わってくる。彼に紹介してもらえた本は、幸せだ。己の魅力を誰かに認めてもらえるなんて、そしてそれを他の人に伝えてもらえるなんて、とても幸せなことだ。

「それ、借ります」

即決だった。

いくら必死で手を伸ばしても届かないとき、私たちは土台となるものを使うか、目標の位置を低くする。あるいは両方。

宇宙飛行士になれないのなら、小説の世界に無限で広大な宇宙を見つけたい。小説という土台を使って、フィクションかつノンフィクションの宇宙に行けばいい。そう思え

たのは、成瀬さんのお陰だ。

「ところで、中秋の名月は必ずしも満月じゃない、って知ってる？」

「え、そうなんですか」

成瀬さんはいつもと同じその優しげな瞳で、私を捉えた。

「今年は本日、十月四日が中秋の名月だけど、満月になるのは明後日の六日。月の公転軌道が楕円になってるから、微妙にずれちゃうんだって」

それなら、中秋の名月である今日から二週間前、夏目漱石を借りた日が新月だったのは、ただの偶然だったということだ。満月と新月の間は二週間ではないこともあると、どこかで聞いたのを思い出した。

もしあの日が新月ではなかったら。私は中途半端な月に中途半端に満足して、月について、小説について、見つめ直すこともなかっただろう。これは、月がもたらした奇跡かもしれない。

今までは、満月が一番美しいに違いないと思っていた。三日月や半月も良いけれど、満月が最上だと信じて疑わなかった。だから月の姿が見えない新月なんて、もってのほかだった。新月なんて、存在を意識したこともなかった。

新月だって、満月と同じで立派な月だ。新月も含めて月だ。満月も新月も、現れる回数はず等しい。

完璧な満月じゃなくても、いいのか。

宇宙飛行士になれないから、小説の世界で月に行く。傍から見れば、それは一種の妥協に過ぎないかもしれない。だけど、この選択がこれから満ちていくこともあるだろう。

成瀬さんは、私が初めてここを訪れたときからずっと、私に色んなことを教えてくれた。だから今度は、私も――。

家に帰った後、すっかり暗くなってから家を抜け出して、二週間ぶりにジャングルジムに上った。十月四日、中秋の名月。二週間前、新月の日に絶望した私を、今度は中秋の名月が安らかに照らしてくれる。

「月が綺麗ですね」

夏目漱石なりの愛の言葉を、雲一つない夜空の、金色の月に向かってそっと放つ。年月を超えて、当時の夏目漱石と繋がっているような錯覚に陥る。

今夜も星は見えないけれど、それは月光が眩し過ぎるせいだろう。月は無敵だ。昼間輝いていた太陽の光を受け継いで、健気に夜の街を照らす。

いつか私にも、この月の美しさを共有する相手が現れるだろうか。そのころの私は、自分の信じる道を真っすぐに進んでいるだろうか。空にたった一つだけ浮かぶ月のように、一人でもくじけずに前を向くことができるだろうか。――今はまだ、確信することはできないけれど。

十月四日、中秋の名月。ジャングルジムの頂上から、月に向かって手を伸ばせ。身長なんて関係ない。その中指が触れなくても、精いっぱい、月に向かって手を伸ばせ。